

鳥居龍藏（一八七〇—一九五三）を代表とする武蔵野会にも積極的関与をしており、同会が関東大震災後の一九二四年二月に帝都復興院總裁（内務大臣）へ「帝都復興に際し史蹟名勝天然記念物保存に関する建議書」を提出したことなどは、官民一体となった「公」的保存への試みとみなすことができよう。その不可欠な要素として「名家墓所」は位置づけられ、そこへ眠る「公」的重要人物の顕彰のために、墓所の来歴について検証が要請されることにこそ、都市計画とは別の「墓地の近代性」をうかがうことができる。

韓国・円仏教の死者儀礼

——全羅南道珍島の事例から——

川上新二

発表者は最近、韓国宗教民俗研究会編『韓国の宗教と祖先祭祀』（二〇〇八年、岩田書院）の書評を書く機会があり（『宗教研究』三六〇号）、その際、韓国の祖先崇拜に関して儒教祭祀を中心に研究が行われてきた従来の傾向を考えると、仏教、キリスト教、新興宗教と祖先崇拜との関係を考察していることが何よりも同書の業績であると評した。ところで同書では新興宗教としては天道教だけが対象とされていたが、発表者は以前、仏教系の新興宗教である円仏教の死者儀礼について、珍島での事例を通じて報告したことがある（『韓国における仏教と

死者儀礼の近年の動き」朝倉敏夫他編『グローバル化と韓国社会』国立民族学博物館調査報告六九）。本発表では韓国の諸宗教と祖先（死者）崇拜の関係を考察する一助になるのではないかと考えたから、改めて円仏教の死者儀礼を検討する。

円仏教の死者儀礼は薦度齋と呼ばれるが、発表者は右の拙稿で、円仏教の薦度齋は生者に影響を与えているとされる死者に対して行われ、その死者は儀礼の依頼者と如何なる関係にある死者かという点でも、如何なる死に方をした死者かという点でも巫俗儀礼で扱われる死者の様相と一致するため、依頼者は円仏教の薦度齋を巫俗儀礼と並立する、生者に影響を及ぼす死者に対処するための選択肢の一つとみている可能性がある」と指摘した。しかし円仏教の薦度齋には巫俗儀礼と異なる面も指摘できる。以下この点を検討してみたい。

まず指摘できることは、死者に対する姿勢の違いである。巫俗儀礼では死者は巫女に憑依し巫女の口を通じて自分の恨みや悔しさを生者に伝え、生者は死者に要望を伝えたり死者の話す内容に対抗したりもする。巫俗儀礼では死者と生者は対等な関係にあるということが出来る。一方円仏教の薦度齋では、死者の恨みや悔しさを生者が聞いてそれに共鳴したり死者を慰撫したりする場面はない。死者それぞれの思いは執着とみなされ、読経祝願などを通じて死者に執着心を捨てさせ、善道修行の縁によつて冥福を増進させるというのが円仏教の薦度齋の内容であるため、そこでは死者よりも生者が優位に立つとみることが出来る。なお巫俗儀礼と相互補完的な機能をもつとされる儒教祭祀では、生者は死者をひたすら敬う立場にあり、生者から敬

われる死者が優位に立つといえる。

円仏教の薦度斎と巫俗儀礼、儒教祭祀との違いとして次ぎに指摘できることは、儀礼に参加する人々の様相である。儒教祭祀は男性中心で行われ、男性の父系親族に重点をおいた儀礼である。一方巫俗儀礼では嫁、姑、小姑、相嫁、それに友人などの女性たちによる協力が指摘されている。父系親族と女性たちのあつまりという性格の違いはあるが、どちらの儀礼にも「集団」との関わりが指摘できる。それに対して円仏教の薦度斎は、例えば女性信徒に対して、夫の家族と一緒に家でも祭祀を行い、またそれとは別に一人で円仏教の施設に来て祭祀を行うことを勧める場合があるように、個人でも実施が可能とされる。

このように円仏教の薦度斎は韓国の人々に、死者よりも生者が優位に立ち、また個人でも実施が可能な儀礼を提供していると解釈できる。近年の韓国社会の様々な面での変化に伴い、儒教祭祀でも女性が実家の父母のために祭祀を行ったり、巫俗儀礼でも関係者数人だけが参加する小規模な儀礼が増えたりしているようである。また女性が実家の父母を仏教寺院で祀る場合も多くなっているという。このような状況を見ると、従来のように父系や夫系のつながり、または女性同士のつながりを通じて死者への儀礼を行うのではなく、身近な死者を個人的に祀るという傾向が広まっているようである。そうであれば個人でも実施が可能な円仏教の薦度斎には、現代韓国社会において身近な死者を個人的に祀ることが可能な儀礼として展開できる可能性があると思われる。

日本民間神楽の「白い布」

三村 泰 臣

一、問題提起 神楽は「神座の前の神あそび」と定義され、神を招き・遊び・送る鎮魂の歌舞と考えられてきた。この鎮魂を五来重はタマフリとタマシズメの二面をとらえ、従前の定義はタマフリで、日本民間神楽の本義はタマシズメにあるとした。ところで日本民間神楽で目にする「白い布」はとりわけ中国地方の荒神神楽祭祀の中によく残っており、古代から中世の神楽祭祀の跡を止めている。この白い布を追究すれば、複雑な荒神の霊格や荒神神楽祭祀の意図を解明できるだけでなく、五来説を確認し日本民間神楽祭祀の定義や研究の方向性を提示することが可能になる。

二、中国地方の荒神神楽祭祀で使われる「白い布」【事例一】「比婆荒神神楽」（広島県）。白い布に荒神を包んで迎え、棚に安置し白い布を張りめぐらす。祭主たちは白い布を肩にかけて互いにつながり土公神遊び（庄原市西城町平子）や荒神遊び（東城町栗田）をおこなう。荒神舞納めで藁蛇にのせた白い布を神柱がとって狂い舞って神がかかる。その白い布は荒神祠に埋められる。【事例二】「備後神楽」（広島県）。舞場に白い布をクロス状に張りわたし、その下を三名の舞手が潜りながら舞い神がかりする（世羅郡世羅町小国）。【事例三】「周防神舞」（山口県）。白い布に荒神をくるんで迎え、天井から引いた三本の